

長崎自然共生フォーラム News Letter

新春号（第7号） 2009年2月1日 発行

論説に代えて —

長崎県生物多様性保全戦略 （仮称）の策定について

県自然環境課 牛場雅己・千々布義朗

現在、長崎県では平成20年3月に制定した「長崎県未来につながる環境を守り育てる条例」に基づき、県が将来にわたって生物多様性保全の施策を進めていく上での基本計画「長崎県生物多様性保全戦略（仮称）」（以下「県戦略」）の策定作業を進めています。

ここでは、紙面の関係もあり、すべてをお示しすることはできませんが、策定のねらいや経過等も含め、その概要を簡単に紹介します。

ねらい：「県戦略」（案）は、生物多様性の重要性和理念の普及を図るとともに、県の生物多様性保全施策を分かりやすく体系化し、広く発信することにより、県民の皆さんの理解を得ながら、県による取組の強化と、県民、事業者、市町など、多様な主体による取組の促進を図ることを大きな狙いとしています。

経過：「県戦略」の策定にあたっては、平成20年4月に長崎県環境審議会へ諮問を行い、専門部会を設置して検討を進める一方で、県民や市町等へご意見、ご提案や生物多様性に関する情報提供を呼びかけるとともに、NPO等との意見交換やパブリックコメント等を経て、平成20年11月25日に、県環境審議会から「県戦略」（案）の答申をいただきました。現在、平成20年度中の策定を目途に作業を進めています。

県戦略の構成：審議会から答申された「県戦略」（案）は、第1部の「基本計画編」と第2部の「行動計画編」で構成されています。第1部「基本計画編」では生物多様性の果たしている役割、重要性や本県の生物多様性の現状を示した上で戦略の目標と目標を達成するための基本方針を示し、第2部「行動計画編」では目標を達成するための具体的な取組を基本方針に沿った形で示しています。

なお、「県戦略」（案）の詳細については県HPをご覧ください。

（<http://www.pref.nagasaki.jp/koho/pubcom/h20/size nkankyoku/kekka.html>）

豊かな長崎県の生物多様性は、私たち県民の生命・暮らし・文化の基盤です。

「県戦略」は、生物多様性を保全、再生し、薄れつつある人とふるさとの自然とのつながりを回復させ、将来にわたって持続的に生物多様性の恵みを享受できるような人と自然が共生する社会の実現を目指しています。

そのため、県民のすべての皆さんの「県戦略」に対するご理解とご協力をお願いするとともに、多様な主体とのつながりによる連携・協働のもとで「県戦略」が推進されることを強く期待しています。

特 集 —

特集：地球温暖化2 考えよう地球温暖化 in 長崎（長崎海洋気象台創立130周年記念講演会）から

事務局

去る平成20年11月29日（土）14時から、長崎市立図書館多目的ホールで開催された。当会の早瀬教授がゲスト・スピーカーとして講演された。事務局で団体申し込みを行い、鈴木・久保田・川里の3名が聴講した。はじめに、加納祐二台長のお話で、古くは江戸時代から長崎（オランダ商館）で気象観測がブロンホッフやシーボルトらによって始まり、幕末維新時にはポンペやヘルツらによって医学伝習所（海星高付近）で気象観測が行われ、明治11年（7月）に正戸豹之助によって全国で4番目の「測候所」（東山手）が開設され、昭和22年（4月）に宇田道隆によって現在の海洋気象台（南山手）が設立され、200年に近い気象記録があることがわかった。これは地域にとって凄いことである。

つづいて、気象庁諸岡浩子調査官から「地球温暖化の監

視と予測」と題して 1) 気候システムと温室効果 2) 温暖化は始まっている 3) 温暖化の将来予測 4) 最近の取り組み の内容でわかりやすい解説があった。膨大な資料解析に基づく有意義な話であったので、その概略を述べる。話の中で、とくに IPCC(気候変動に関する政府間パネル) 第4 次評価報告書では気候システムの温暖化には疑う余地がないとされているが、これについては地球科学者の間では反論もある(丸山茂徳: 東大教授ら、当会ニュースレター 第5号参照)。しかし、生物季節現象でカエデ紅葉は50 年で15 日以上遅くなっていることなど現実味あふれる内容であった。CO2 排出シナリオなど将来予測から見る温暖化への対応の話は、今後20 年に0.4℃気温上昇することが明らかになった現在、猶予できない警告であると思う。熱帯夜・真夏日の変化と同じく、降水量の変化も注意する必要も説かれた。気象庁が取り組んでいる、地球温暖化の観測・監視・予測の強化は年々充実しているが、中でも予測の高精度化とくに地域別予測モデル開発に期待したい。

(要点)

- 1 地球温暖化は、もう始まっている：世界の気温は過去100 年で0.74℃上昇している。
- 2 たくさんの変化が報告されている
 - ① 海面上昇 20 世紀の間に17 cm 上昇している。
 - ② 北極の氷 氷面積が減っている。
 - ③ サクラの開花 サクラの開花日が早くなっている
- 3 地球はどうして暖かくなっているの？：二酸化炭素はビニールハウスのように、熱をためる効果がある。そのおかげで地球はビニールハウスのようにヒトが暮らしやすい温度になっている。しかし、石油や石炭を大量に使うことで二酸化炭素が増えると、ビニールハウスの中が暑くなってしまう。これが地球温暖化現象だ。
- 4 100 年後の地球の姿：21 世紀末、少なめでおよそ1.8℃、多めで4.0℃予測されている。また地球の北半球の高緯度で気温の上昇が大きく、あまり上昇しないところもある。将来、東京が鹿児島より暑くなり、北海道の一部では4℃の気温上昇が予測されている。
- 5 温暖化が進むと心配されること：① 災害(洪水・暴風雨) ② 病気(マラリア・熱中症) ③ 食べ物(飲み水・食糧)

二人目の専門家の話は、「長崎における気候変動や異常気象」(石川高照長崎海洋気象台次長)であった。

(要点)

- 1 長崎の平年値(1971～2000 年平均)：平均気温(16.9℃)、最高気温(20.7℃)、最低気温(13.6℃)、相対湿度(71%)、雲量(6.5/10)、降水量1959.6 mm、降雪深さ(4 cm)。
- 2 生物季節の経年変化(植物)：晩秋の現象が遅く、冬

から春の現象が早くなる傾向。ツバキ(平年1/14)、ウメ(1/25)、ソメイヨシノ(3/25)、イロハモミジ(紅葉11/27)。

- 3 生物季節の経年変化(動物)：種により傾向はさまざまだが、生息環境の変化や行動形態かわる恐れ。モンシロチョウ(平年3/12)、ツバメ(3/18)、ホタル(5/22)、アブラゼミ(7/18)。
- 4 海面水温・海面水位：九州・沖縄海域は1980 年代から上昇傾向。100 年あたりの上昇率は、世界全体の上昇率0.49℃より大きい。また水温上昇により水位の変化傾向はほぼ一致している。
- 5 長崎の異常気象：真夏日(日最高気温30℃以上)・熱帯夜(日最低気温25℃以上)・猛暑日(日最高気温35℃以上)は微増傾向。冬日(日最高気温0℃未満)は減少傾向。
- 6 長崎の特異現象：雪日数は1990 年代を中心に減少。霧日数は1960 年ごろにかけて減少し、少ない状態続く。雷日数は近年やや増加傾向。

「長崎における地球温暖化防止への取り組み」(長崎大学環境科学部：早瀬教授)

冒頭に、「環境にやさしい製品」や「環境にやさしい技術」は科学的に決めることができるのか(1 エコマークはどうして決めるの？ 2 「廃棄物を焼却する技術」は、はたして「環境に優しい」といえるのか?) と言う投げかけがあった。教授は、環境問題を議論する際のポイントとして次の三つを上げた。①「環境に優しい製品」や「環境に優しい技術」は科学的に決めることは出来ない、② 目標は「基準の達成」ではなく「環境への負荷を出来るだけ削減すること」、③ 今われわれが直面している環境問題の特徴は「科学的不確実性」と「利害関係複雑さ」にある。たとえば布オムツがいいか、紙おむつがいいかは「オムツ使用による資源消費と環境影響」の科学的データみて熟慮し、自分自身が決めることであると説かれた。

これら三つの問題解決のため、とくに環境問題間でのトレードオフと社会経済問題とのトレードオフや不確実性と利害関係者の多様性について、① 市民による価値付けと選択「受容か拒否か」、② 信頼関係のある地域コミュニティの形成、③ 環境政策と地域政策との一体化(地域のあり方)、④ 地域における循環型社会経済システムの創造(地産地消、小規模エネルギー供給、公共輸送機関のシームレス化等)など、市民の参加と地域役割が必要である。例として「長崎県未来につながる環境を守り育てる条例」(i 県、県民および事業者による地球温暖化対策、ii 一定量以上の温室効果ガスを移出する事業者にたいしては排出削減計画書および排出削減報告書の提出を義務付ける、iii 一定量以上の駐車場設置者に対して、利用者に駐車のアイドリングストップの実施を呼びかけることを義務づける。)をあげて、チャレンジ的ではあるがと評価された。

つぎに、温暖化問題について、従来の政策枠組みによる過去からの施策の延長線上では対応出来ない、また社会や経済システムの革新・変革が求められている（たとえば7～8割削減や炭素税）と述べ、「わが国の長期的革新的政策形成の可能性」として、行政の情報公開を一層進めた利害関係者を含む創造的な議論の場の活性化、また十分な情報にもとづく熟慮と公開の討議の節にかけられた、公共的価値判断を実現しうる場の活性化などを提唱された（たとえば長崎の交通システムをどう考えるかなど）。

以上を実現するため、「長崎県地球温暖化対策協議会」（事務局：長崎県環境部未来環境推進課）があり、「長崎県ストップ温暖化レインボープラン（行動計画）」：2006.3が始まっている。さらに地域における個々人の努力を支え、社会的な繋がりに結び付けていくような仕組み制度を産み出していくために、市町での協議会を設け、公平な参加の機会提供・地域での学びの場・信頼関係の育成の場とすることを述べられた。

最後に、「環境問題」は「関係性」の問題であり、人と人との豊かな「関係」を作り、人（社会）と自然との「関係」を改善する、さらに国際的な視野、例えばインドネシアの人々との豊かな「関係」作りも不可欠、と結論された。フロアから“環境問題の本質は人口ではないか”、“CO2 権の売買は本当によいことか”など質疑があった。（川里弘孝）

長崎県生物学会 第38回大会の開催

事務局

恒例の大会（講演会・研究発表）が、1月11日（日）長崎市科学館であった。総会を兼ねる年1回の大会で、長崎市と佐世保市とで交互に開かれており、会員50名余が集まった。10：00開会、総会行事（会長 池崎義博長崎女子短大教授）は滞りなく運んで、メインの学術講演は「昆虫の探索行動と空間認知」と題して、長崎大学環境科学部の岡田二郎准教授が講演された。午後からは口頭発表とポスター発表が行われ、時間中は書籍販売も行われ、15：55 盛会裏に終わった。以下、参考までに講演内容と発表テーマを掲げる。

＜講演内容＞ 動物は探索により自身が置かれた空間環境を知ることができる。とりわけ視覚以外の手段に依存する場合、動物は周囲を歩き回りながら触覚を用いて探索をおこなう。本演題では、室内の行動実験に基づいた夜行性昆虫（コオロギとゴキブリ）の探索行動と空間認知について紹介する。（大会レジュメから）

＜口頭発表＞

①大村湾のスナメリ：中村晴美（西海パールシー）

- ②遺伝子から見たHTLV-1と日本人のかかわり～どこから来て、どのようにひろまったか～：江口克之・藤井秀文・大谷正史・大島謙吾・山本太郎（長大熱帯医学研究所）
- ③長崎県野母半島沿岸で捕獲されたインダイとインガキダイの交雑種：末吉麻耶子（長崎ペンギン水族館）
- ④長崎市における総合公園の植物：小椋ゆうき・中西こずえ（長崎大学・環境科学部）
- ⑤長崎県新記録のヤクヤモリ：松尾公則（長崎北高校）
- ⑥ウスアオリンガの生長記録：遊佐匡子（西海パールシー）
- ⑦長崎県の蝶類の現状：峰 正隆（諫早高校）
- ⑧長崎県のカヤツリグサ科植物の分布と生態：田中慶太（長崎市立戸町中）

＜ポスター発表＞

- ①長崎県沿岸のウミシダ類（棘皮動物門；ウミユリ綱）：幸塚久典（長崎ペンギン水族館）
- ②マガモは同じ経路を往復するか？：馬田勝義（早岐小）
- ③長崎県におけるハマオモトの分布と生態：三浦夏奈子・中西弘樹（長崎大・教育）
- ④対馬における5年間のヌマガエル分布拡大：三谷奈保・戸田光彦（自然研）・萩野伊万里（武蔵美）・玖珠博一（対馬市役所）・野田一男（対馬林業）・松尾公則（長崎北高）
- ⑤植生帯内における蘚苔類のフロラ多様性：平井舞子・金子由紀・陳曉慧・中西こずえ（長崎大学・環境科学部）
- ⑥対馬で捕獲されたユキソデフリウオについて：山崎悠介（西海パールシー）
- ⑦長崎県で発生したキョウチクトウスズメガ：池崎義博（長崎短大）
- ⑧長崎県大村湾の海産種子植物：吉岡一也・中西弘樹（長崎大・教育）
- ⑨兵庫県から飛来したコウノトリ：谷口秀樹（長崎市鳴海台小）
- ⑩長崎県における水田及周边雑草フロラの季節変化：堀田智子・山口知子・中西こずえ（長崎大学・環境科学部）
- ⑪対馬で発見したドロアワモチ：小原良典（西町小）

以上

歴史と風土を活かした美(ちゅ)ら街づくり：日本造園学会九州支部平成20年度沖縄大会報告

事務局

昨秋11月22日から23日にかけて、名護市の名桜大学で標記大会があったので、報告する。例年どおり、午前中は研究・事例報告がAおよびB会場（講義棟108・109号室）で、昼食時に総会（110号室）があった。午後からは研究・事例報告の残りとし、基調講演があり、休憩をはさんで、シンポジウムがそれぞれ多目的ホールで開催された。夜は18時

から学生食堂で交流会が開かれ、約90名の参加があった。

翌日のテクニカルツアーはA 本島北部自然コース（マンガローブ林～ヤエヤマヒルギ北限地）、B 歴史散歩コース（琉球王国グスクおよび世界遺産群～今帰仁城址・首里城公園）に別れて巡検した。

（A・Bコース共通で海洋博公園の世界一といわれる、沖縄美ら水族館と、隣接するフクギ林と備瀬集落を周った。伊江島を望むラグーンの、砂丘上に発達した熱帯性のフクギ林に囲まれ、自然・景観のみならず言語・習慣・年中行事風俗など周囲と異なった集落形態：フクギの里～半農半漁で300年？続いている風水思想集落で、バナ：花、パー：歯、ピサ：足など日本語の原型（P音）や拝み堂（ユタ神殿）も残っており、かろうじて米軍の爆撃を免れた、との仲宗根元校長先生の解説もあった。古くからの人と自然との共存のあり方が少し理解できた。と言うより、片や沖縄経済の起爆剤：美ら水族館、片や歴史性：フクギ並木（歩きたくなる道500選）と古集落が全く背中合わせの、沖縄の現実を痛感した。）

基調講演は、涌井史郎（造園家・横浜桐蔭大学特任教授）が、「地域遺伝子としての景観形成～環境革命の時代に～」と題して、わが国は国連の生物多様性条約が忘れて環境システムが弱体化している、経済活動は致し方ないが今、環境革命を起こすべきと地域の感性（匠の心）化を強調した。シンポジウムは蓑茂寿太郎（日本造園学会長、熊本県立大理事長・教授）のコーディネイトで、涌井史郎（前出）・池田孝之（琉球大学工学部教授：都市・地方計画）・新里（しんざと）孝和（琉球大学農学部教授：造林・森林生態学）・福島駿介（琉球大学名誉教授：建築学）・田畑正敏（沖縄総合事務局公園・街づくり調整官：造園職）の6パネリストで討論が行われた。蓑茂会長は「地域資源力」で論戦をリードし、涌井教授の「地域遺伝子が景観をつくる」に同調（池田教授）、「薪炭林の緑の機能と地域調査」（新里教授）、「沖縄らしさ～フクギ林・マキ・リュウキュウイモ・シマトウガラシ」（福島教授）、「美ら沖縄と街づくり法」（田畑調整官）などの意見があった。とくに“地域目標”の談義では、福島氏は「沖縄は技術がともなわず、土地の利用が疲弊して傾いている」迫及し、新里氏は「沖縄は外来種問題・地方弁問題・総合景観目先の保全・公共的事業が機能・里山づくりの遅れ」を述べ、池田氏は「自然資本、生態環境都市、保全・活用の地域づくり、発掘・研究への共同参加」を提言した。蓑茂氏は「地域力は地域遺伝子」と結論した。

フロアから、「ヤンバル・ツバキの会など地域の共同参加が認められて5年経った。しかし、この後30年位はかかるであろう。とくに農業は生産・管理・コストで問題が多い。どうやって環境を維持できるのか？」など難しい質問があり、涌井氏は「沖縄には自然遺産・有形文化財・歴史遺産があり、県民景観遺産：佐賀県、流域文化財：四万十川など各地で“覚悟の表われ”が出てきている。“ダビデの星”ではないが政策論が必要で、専門家による益と不益の見極

めをすべき」との回答があった。以上

（研究・事例報告タイトルおよび発表者は割愛）

談話室 —

エキスカーションは楽しい

事務局 川里弘孝

学会や研修会の折に行われるエキスカーションは楽しい。知らない土地の自然と人との風景に触れられるのがよい。地方ならではの味とうまい酒にめぐり合え、温泉もあれば、なお、格別だ。昨秋、佐賀の石井樋公園・さが水ものがたり館を訪ねることが出来た。石井樋は、嘉瀬川から多布施川へ水を分ける取水施設で、佐賀城下の生活用水と農業用水とを確保するため、佐賀藩士 成富兵庫茂安によって造られた。天狗の鼻や象の鼻など石積みによって浄水能力高めた、「井樋」の土木技術は見事なものである。まさしく、当会の池田武邦名誉会長が言われた、“江戸時代に学べ”の地方版である。付近は、国交省が造った「さが水ものがたり館」を中心に公園化されており、ゆっくり廻ると楽しい。30分の迅速・基本コースもあり、佐賀大和ICに近い。

近くには、東予賀海岸：シチメンソウ群落、吉野ヶ里歴史公園、佐賀城もあり、松浦川の事業地：アザメの瀬氾濫原的湿地の再生を廻ると、アザメの瀬自然環境学習センターがあり、河川型自然共生事業を一通り学ぶことが出来る。武雄温泉も遠くない。

<<http://www.gsr.mlit.go.jp/takeo/>を参照ください>

自然共生の科学技術： 最近の学会・講演から 公開シンポジウム 「自然再生の課題と展望」

事務局

昨年の2008年9月、福岡大学で、応用生態工学会・日本緑化工学会・日本景観生態学会の三学会合同大会があった。その折、公開シンポジウムが開かれた。各講演の内容を要約して紹介する。

○竹林を通して見る里山再生に関する試み：

柴田昌三（京都大学フィールド科学教育研究センター）

1. 里山の荒廃と竹林の放置・拡大：日本の主要三大竹；モウソウチク（中国原産）・マダケ・ハチク（日本原産？）のうち、筍生産の中心はモウソウチクであったが（1970年代～）、里山放置と時期を同じくして、竹材生産の中心であったマダケ・ハチクとともに放置が進んだ（1990年代）。

2. **竹林拡大の変化**: モウソウチク林は雑木林・植林地に拡大, マダケ・ハチクは植生の中木層を占めるように拡大した。竹林パッシングは, 環境省の生物多様性戦略などの影響もあるが, 整理伐後, 管理竹林とする手法の導入が必要である。
3. **竹林を評価するとき, 知っていたほうがよさそうなこと**: 自然竹林と管理竹林の同調 (バランス) を図るための基礎調査 (上田・沼田, 1961) 以来, マダケの全国レベルでの一斉開花枯死現象 (1970: タケ特有の 100~120 年周期の生理的現象) があり, 竹材生産量の減少の一因と見なされている。モウソウチクは, 乾燥に強く明瞭な開花周期をもたず, マダケ・ハチクとは異なる適応戦略をもっている。
4. **これからの竹林を含む里山の扱い方**: 竹林は ① 管理竹林 ② 放置竹林 ③ 拡大竹林 ④ 木竹混交林 に分けた扱いが重要である。例えば林縁植生によってかつての管理竹林の位置を判断してその内部を管理竹林に戻し, 外部を拡大竹林と判断して対策を講じる。一方, モウソウチク林とマダケ・ハチク林は開花現象に伴う植生衰退を踏まえ, テングス病対策をはじめとする, 新たな再管理: 密度管理を考える必要がある。竹林は, また放置された薪炭林・植林地と同様, 再生できる里山植生として評価できる。(われわれの身近な里山についても応用できる内容だった)

○トキの野生復帰を実現可能にする自然再生の手続き:

関島恒夫 (新潟大学大学院自然科学研究科)

省略。

○丹沢山系における自然再生の試みと課題:

山根正伸 (神奈川県自然環境保全センター研究部)

1. **はじめに**: (景観生態的手法も含めた総合調査と合意形成の必要性を説いている。)
2. **自然再生の経緯**: (御料林など良好な状況→関東大震災→治山事業と緑の回復→シカ問題・自然林の衰退→自然環境問題の複雑化→希少種の減少・外来種の侵入, 里地・里山の活力低下→生態系サービスの低下→問題解決型調査。)
3. **丹沢総合調査**: (→8つの特定課題の現状診断と解決の処方箋づくり→① シカ分布拡大, ② 登山道の裸地化, ③ 造林地のシカ被害発生 ④ モミ林の衰退 ⑤ 高海拔地の林床植生退化 ⑥ ブナ林の衰退 ⑦ 車・ゴミの影響 ⑧ 土壌保全→自然再生基本構想および政策提言。)
4. **情報整備と総合解析**: (→自然環境情報ステーションの構築, 総合解析の実施→オゾン・シカ・ブナハバチ・・・ブナ林の消失・衰弱; リスク評価とそのマップ化→土壌流失・ブナ林生態系変化。)
5. **自然再生目標の実現にむけて, 再生事業の実施と課題**: (自然再生推進本部～副知事レベル・県自然環境保

全センター, 自然再生委員会～市町村・国・市民団体・企業など, の設置。)→モニタリングの実施・継続的な情報管理・適切な解決手法の開発→予算・人員配置, 技術マニュアルの整備。

(地域再生の手本となるような話題だった)。

○自然再生の社会的課題:

桑子敏雄 (東京工業大学社会理工学研究科)

1. **自然再生の社会的文脈**: “談義所” の開催～(環境省地球環境研究総合推進費研究プロジェクト; トキの野生復帰のための持続可能な自然再生計画の立案とその社会手続) の中で行われたものである。宮崎県日南市飫肥地区にある「談義所」に由来する。義＝「重要な意味をもつこと」を議論する場であり, 地域の人々の心のよりどころであったが, 機転により明治維新の廃仏毀釈を免れ, 寺院であることを隠蔽したとされる。現在では子供たちやお年寄りの交流の場として機能, それぞれ地域の人々の, 地域特性を冠した「談義所」として (例: 前浜小中学生談義所) 佐渡島全域に行きわたっている。(“トキと社会”, 中略)
2. **行為としての自然再生と歴史への介入**: 明治維新以前は地域が自主的な掟をきめ, 厳格な心のもとで共同利用していた空間があった; 入会地, 共同所有地という意味ではなく, 共同利用できる資源の共有地という意味である。河川・湖沼, 山林, 海などは地域共同管理空間であり, 「コモンズ; commons」の概念である。河川や湖沼の自然再生もまた入会的なコモンズの再生という文脈で語らなければならない。生態系と社会的管理システムとの不即不離の関係である。自然再生という歴史的介入行為に対し, 空間の再編という形で影響をうけ, それ自体が歴史的な生成物である。自然再生は関係者が多様に介入する歴史的行為であることを忘れてはならない。自然再生にかかわるということは環境に対する歴史的介入者として存在しているという自覚をもたなければならない。自然再生に携わるものはその行為について, 多様な関係者から, 多様な視線によって評価される。対立・紛争の防止, 回避, 解決を行うためには, こうした歴史性の認識が不可欠である。事業に対する人々の意見の理由を知ることは, 事業に関係する人々, 地域に生きる人々や行政関係, あるいは研究者の意見理由の生成に対する理解をもつということである。「切り崩し」と呼ばれる行為は問題解決より紛糾させる原因となる。アンケートでは問題の本質を認識することは出来ない。何故なら生成の理由の理由は歴史的に生成してきたものであり, 個人のプライバシーに接する領域に位置し, ある場合は秘匿したいと思う場合もあるからである。関心・懸念は当人にさえ意識されているとは限らないからである。関係者との話し合いで探り当てるのがもっとも確実な方法である。
3. **包括的再生と社会的合意形成の課題**: 自然再生は地域

再生と同じ視点にある、山と川と海の恵みをつなぐ再生である生態系と一体となった地域の仕組み（「地域共同管理空間」：コモンズ）は二者択一的思を超える思想である。リスクの負担区分をどう行うか、行政機関間のコミュニケーションギャップを埋める。これは NPO に求められている役割である。

4. **参加型合意形成プロジェクト・マネジメントの技術**：プロジェクトの諸条件には統合・目標・時間・コスト・品質・人的資源と組織・コミュニケーション・リスク・調達のそれぞれのマネジメントが必要である。加えて社会的ニーズの明確化、事業範囲のマネジメント、責任体制の明確化、モニタリングシステム、評価への対応を指し、自然再生は人間による生態系と地域社会に対する介入行為である。「よりよい」状況になるようにするのが技術である。新たな哲学の創出、知識・技術・情報の獲得、制度・しくみの整備、意識・動機づけ、行動、そして具体的な環境変化を包括するものである。

（自然再生について、社会科学的に切り込んだ話で、科学・技術に携わるわれわれにとって用心を促す、示唆にとんだ話題提供だった。）（川里弘孝）

ブックガイド

- “Green Letter:30”（永年続いている年一回発行の、総ページ 35・B5 判の小雑誌だが、毎号毎の特集が良い。編集者が優れているからであろう～瀬田信哉：元環境庁審議官、岡島成行：大妻女子大教授・元首相補佐官、出石忠彦：富士フイルムホールディングス・株。本年号の特集は“つながる いのち”。アンケートに答えると郵送費のみで送ってくれる。（問い合わせ先：〒110-8676 財・自然環境研究センター内 公益信託法人 富士フイルムグリーンファンド事務局）
- “墓石の下に眠らない”（樹木葬とか散骨とか今、墓石を建てない人あるいは建てられない人が増えている。いわゆる自然葬にまつわる、ルポルタージュを中心に「自然に還る」人々へのメッセージの本。筆者もかねてより樹木葬に魅かれており、朝日新聞・新刊案内をみたので改めて紹介する。黒田麻由子著、朝日新書）
- “凍った地球 スノーボールと生物進化の物語”（生物は 38 億年かけて、単細胞から多細胞へと進化してきた。地球上で何かが起こることで多細胞生物は変わって行く。地球の「全球凍結化」と今の「温暖化」の CO2 レベルは桁違いであることと、生物の進化とのからみ具合がよくわかる。田辺英一著、新潮選書）

お知らせ

○昨年 6 月の総会での申し合わせにより、会費未納者あてに 7 月に文書を送りました。その後、大半の方に振込みをいただき、ありがとうございました。ただ一部の方は、ご返事がありません。大変残念ですが、次の方々は除籍させていただきます。1 年分でも納入いただけたら、会員として復活できます。（事務局長）

緒方宏行、小川三郎、小川良子、鴨川弘治、君野昌二、田川香月、朝長靖司、中溝岳文、中溝 忠、西田卓生、三矢泰彦、米本正明、松田英明、進藤友紀、（五十音順）

○退会者：岩崎英喜、田島直人、中溝可郎、真崎健次、増山和生、増山高広

○入会者：豊里一朗

事務局だより

全国各地で、自然に関する講演会・シンポジウムが開かれる中、時間と資金の許す限り、参加・聴講しています。とくに身近な自然との共生に関して、これからも生涯学習です。各位の情報・考えも聞かせてください。

【編集部から】

原稿を募集します。論説・随想・紀行文・技術報告・写真等、体裁は問いません。最低 1,000～1,200 字程度でお願いします。二段組みはこちらでやります。E-mail での投稿、大歓迎です。（M）

(nagasaki_coexistence@hotmail.com)

事務局 会長 宮原和明

〒851-0123 長崎県長崎市網場町 536
長崎総合科学大学建築学科宮原研究室（担当：牧）
TEL：095-838-4114 / 095-838-2481
FAX：095-830-1281 牧：090-7161-5408
E-mail：Nagasaki_coexistence@hotmail.com

アネックス 1 事務局長 川里弘孝

〒856-0824 大村市水田町 1098
（長崎大学大学院生産科学研究科）
TEL：0957-50-1355 FAX：0957-50-1355

アネックス 2 副事務局長 為永一夫（県央地区担当）

〒856-0820 大村市協和町 790（株）タメナガ造園
TEL：0957-54-0271 FAX：0957-54-1127

アネックス 3 副事務局長 松田英明（県南地区担当）

〒851-2212 長崎市畝刈町 1613-251（株）松田久花園
TEL：095-850-0714 FAX：095-850-0715

アネックス 4 副会長 山本規仁

〒857-0103 佐世保市原分町 1052-3 山本造園土木（株）
TEL：0956-49-3939 FAX：0956-49-4747

アネックス 5 副事務局長 田雑豪裕（県北地区担当）

〒857-1161 佐世保市大塔町 574-5（株）庭建
TEL：0956-31-2011 FAX：0956-31-2310